

書評：海津忠雄・東方敬信・茂牧人・深井智朗『思想力——絵画から読み解くキリスト教』
芦名 定道

西洋世界が古代ギリシャ文化とキリスト教という二つの伝統の決定的な影響下において形成されたこと、キリスト教を無視しては、西洋文化、とくに、文学・小説、音楽、絵画、建築、舞踏・劇などの芸術全般は深く理解することができないこと、これは、明治以来の日本人の、いわば常識に属すると言えるだろう。キリスト教と西洋文化とは、きわめて緊密な関係にあり、それについては、これまで多くの議論がなされてきた。本書は、このいわば自明とも言える事柄に対して、「思考力」という斬新な切り口からせまることによって、二十一世紀の現代日本人に「新しい意味での教養のセンス」を問うた論集である。

「あとがき」で著者の一人である深井智朗氏が説明しているように、本書は、一昨年青山学院大学を会場に行われた、「スペシャル・カレッジ（「青山『書く』院大学）」」での四人の著者の講演をもとに、新たに書き下ろされたものである。海津忠雄（第一講義）と東方敬信（第二講義）両氏の講演は、「レンブラント」を共通テーマとしており、本書全体の主張を明確に提示したものである。それに対して、茂牧人氏（第三講義）は問題を哲学的に掘り下げ、深井氏（第四講義）は議論を現代神学へと拡張している。ここでは、第一講義と第二講義を中心にして、本書の魅力を紹介することにしよう。

「第一講義」で、海津氏は、エッチング作品を題材にして、レンブラント芸術の特性が劇場性にあることを示した上で、「放蕩息子の帰宅」について、次のように説明している。

「レンブラントは、放蕩息子の帰着の時点から、僕たちが主人の命令を実行するまでに過ぎた時間をまったく短縮するか無視して、これらが同時的に起こった出来事として表現する」、「レンブラントは兄を、父親と弟の再会の目撃者にし、祝宴と兄の帰宅という異時間に起こった二つの出来事を重ね合わせた」（三八頁）。

これは、放蕩息子の帰宅に対する父の喜びを描く祝宴の場面には、「祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」と語った相手である兄の登場が不可欠だからにほかならない。レンブラントは「一点のエッチング」で、放蕩息子の譬えを語るキリストの深意を表現したのである。ここに、「聖書の画家」レンブラントの劇的表現の冴えを見ることができると同時に、二十一世紀の全人類を祝宴に招く「神のメッセージ」を読むことができるのである。

「第二講義」において、東方氏は、「聖書の深意を描き出そうとする」レンブラント絵画の特性について、十七世紀のオランダの宗教状況を背景とした、レンブラント自身の経験と、それに基づいた「人生やこの世の深み」の表現を指摘する。レンブラントの作品は、「人々に神の恵みに気づかせる聖書の深意を発見させる」という意味で、「新しいアイコン画」とでも言うべきものであり、レンブラント絵画の劇場性は、人間存在の内奥に見いだされる「恵みの構造」あるいは「贈与の構造」を描き出す「内的劇場性」なのである。レンブラントの「放蕩息子の帰宅」は、「今でも、いや今こそ、人生と世界の秘儀を語るアイコンの力を持って」おり、レンブラントの自画像から、わたしたち現代人も、「深い共感から生じる連帯」を見いだすことができる。

以上のレンブラントを具体例として論じられた芸術作品論から「見えないものを見る」という「思想力」の問題へと掘り下げるには、「ものと知性との一致」という伝統的な真理論を超えた「新しい真理論」が必要になる。これが、「第三講義」の問題である。茂氏

は、この新しい真理論（脱根拠としての存在の真理）を明らかにするために、ハイデガーを参照しつつ緻密な論を展開し、それがキリスト教否定神学と通底することを示した。これに対して「第四講義」では、二十世紀ドイツの「表現主義」絵画ならびに「神学的アヴァンギャルド」を手がかりにして、本書のキー・ワードである「表現」の問題が、古い「枠」の解体を通じた新しい真理表現のための「枠」の生成へと展開される。現代人は、「信頼を可能にするために、信じることを妨げているものを取り除く」という「枠」の転換、そしてそれを可能にする「思想力」について、「表現主義的な仕事」を参照できるのである。

「非言語的な文化表現」から「見えないものを見る」という「思想力」の問題は、実は現代思想において共有された問いである。本書を、現代思想のより広い文脈（フーコー『言葉と物』やアガンベン『スタンツェ』など）で読んだらどうなるかなど、読了後の想いは尽きない。本書を通して、芸術をその深みにおいて捉える豊かな知性と感性の大切さを、多くの人々、とくに若い世代の読者に、ぜひ知っていただきたい。